

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

e-mail: shakaisushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幢ケ谷九〇四 電話(03)3337714649 FAX(03)329915367

振替 〇〇一〇〇一九一五八四三一 労金 中央労金本店 No.1154163

購読料 月額 700円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

都教委の暴走に歯止めをかけよう!

増田 都子……………2

義は、われらにあり!

資本の論理は「三角術」……………3

―ライフドア、フジサンケイグループのバトル―

軍隊、戦争、国家 伊勢 太郎……………5

―憲法問題の深層(三)―

「人らしく」とはを問い直した 山崎 秀一……………7

ランニングキャラバン

北海道「国労闘争団激励・交流の旅」へのおさそい 「旅」事務局……………9

―旅程は六月二二〜一四日、二泊三日です―

郵政はどこへ行くのか……………11

定年 「ライフワーク」(護憲運動)に打ち込む K 生……………13

―「ライフワーク」(護憲運動)に打ち込む―

読者からのおたより……………13 編集部だより……………10

旬刊 社会通信

NO. 932

二〇〇五年四月二二日号

二〇〇五年四月二二日発行
(毎月一日・二二日・三三回発行)

都教委の暴走に歯止めをかけよう！

義は、われらにあり

二〇〇三年一〇月二三日、石原慎太郎都知事に任命された横山洋吉教育長は、都立学校の卒・入学式等において、全教職員は正面壇上に貼られた「国旗」に向かつて起立し、「国歌」を斉唱しなければならないとする、いわゆる一〇・二三通達と呼ばれるものを出しました。これに服従しなければ「服務違反」つまり、「処分だ」と恫喝を明記した異常な通達です。

これに対し、憲法・教育基本法に忠実であることを責務とし、法令遵守精神を持つ教職員は、違法な「ルール」への服従を拒否。結果、〇三年の周年行事から〇四年の卒・入学式において不起立を貫いた二百数十人の処分。本年の卒業式でも五十〜六十名余の処分が出ます。定年後の再雇用が決定していた教員及び嘱託教員は即、解雇。「クレージー」としか形容しがたい恫喝・暴力・強権教育行政です。これは都議会の右翼反動都議・土屋たかゆき（民主党・板橋区選出）らとの連携、および産経新聞報道と結びついて行われました。

実は、この右翼都議・産経と連携しての都教委の暴走は、突然、始まったのではないことを、私達「東京都学校ユニオン」および「増田さんとともに平和教育を進める会」に結集したものは、よく知っています。それは、九七年の「東京・足立十六中事件」から始まっていたのです。

事実を歪めたデマ報道で鳴る産経紙しか、この事件を報じず、本来、歯止めになるべき組合（都教組・全教）が所属組合員であった増田を売る、という状況下で、増田への「偏向教育」攻撃に一定の「成功」を収めたこの「事件」以後、産経紙による「校長土下座」をでっち上げての国立の平和教育・民主教育への攻撃、多摩中の「指導力あり過ぎ」教員!? 根津公子さんへの「指導力不足教員」攻撃、日野市の七生養護学校性教育事件、そして、一〇・二三通達と、都教委は全面的に牙を剥き出しました。

しかし、私は、皆様のご支援を支えに二年半にわたる強制懲罰研修にも屈せず、断乎、闘い抜いて現場復帰を勝ち取り、さらに都教委・三悪都議に対して裁判闘争を展開、その違法性・犯罪性を暴露して追い詰めています。

これまで、都議会の中で正々堂々と私達の立場を代弁してくれる都議会議員が見つからず、とても悔しい思いをしていましたが、〇三年末、市民派として真つ当な都議会議員の伊沢けい子さん（市民の党・三鷹市選出）に出会いました。彼女のおかげで、とても有利な裁判状況も出ています。

伊沢都議は〇四年九月都議会で、真つ向から都教委を追及してくれました。また、〇四年三月には、この七年間の闘いの記録を社会評論社から出版することができ、五月二三日の東京新聞文化欄に小さいながら書評が載りましたし、図書新聞は著者インタビューとして大きく載せてくれました。これによって『足立十六中事件』の真実を、より多くの人々が知ってくれるようになりました。

雑誌『新日本文学』〇四年七・八月号にも鎌田慧編集長からの依頼で、私の闘いについ

て紹介する一文を寄稿することができました。

このように、闘えば、必ず連帯してくれる人々が現れ、展望が開けると確信しています。足立十六中事件を嚆矢とした都教委・右翼反動都議・右翼ジャーナリズムによる卑劣な連携下の反憲法・反教育基本法攻撃に対決する人達と連帯し、都教委の暴走に歯止めをかけていきましょう！ 義は我らに有り！

(東京都学校ユニオン委員長 増田 都子)

資本の論理は「三角術」

—ライブドア、フジサンケイグループのバトル—

食うか食われるか

資本とは、資本家・「経営者」と資本の関係とはについては、『資本の論理と企業の論理』(『通信』第九二九号、三月二二日付)に詳しい。資本は剰余価値の蓄積と集積、集中・合併で大きくなる。すべて貨殖をめぐる「競争」という血みどろの抗争を通じてである。

競争とは戦争そのものに他ならないことを示すのが新興勢力のライブドアと旧勢力のフジサンケイグループとの抗争である。現代は証券取引所を中心とする株式売買が集中・合併の手段となる。企業合併は話し合いでおこなわれることもあれば、ムリヤリ買収し傘下に納める方法がある。後者はTOB(敵対的買収)といわれる。会社経営権はその持ち株に比例する。株式会社では社員とは株主である！

ライブドアはフジテレビジョン(東京証券取引所一部上場会社。フジサンケイグループの中核会社)の株式を二二・五%もつニッポン放送の株式を取得することで、フジサンケイグループを乗っ取り、さらに大きくなることを夢見た。

金融自由化の姿

ライブドアは楽天と競いプロ野球参入をはかった。だが楽天の後じんを拝した。ライブドアとはどんな会社か。会社設立は一九九六年四月、株式は東京マザーズに上場する。売上高(〇四年)は三〇八億円である。ネット企業の実態は事業会社に比しきわめてわかりにくい。どんな商売をしているのか。

その事業構成比はコンサルタント九%、ネットメディア八%、eコマース三%、ソフト六%、eファイナンス五三%。eファイナンスは証券会社を買収し、ライブドア証券をつくった。ようするに金貸し業が中心、企業買収でデカくなった典型的なベンチャー企業。貯蓄よりも投資・投機が金儲けの本道とする金融自由化が生んだ新興企業である。だから、労働者数は四六四名、平均年齢は三一歳と若く、年収は五〇一万円とある。

ライブドアの標的とされたニッポン放送は一九五四年に設立、上場は九六年、労働者数は二四四名。平均年齢は三九・四歳、年収は一六四万円である。ニッポン放送は株主五三四一名、発行株式は三二八〇万株の小さな会社だ。しかし、この小さな会社が日本のメディアに大きな影響をおよぼすフジサンケイグループの中核企業であるフジテレビジョンの株式を二二・五%をもつ。ライブドアがニッポン放送の経営権をにぎればフジテレビに大きな影響力をもつとの仕組みである。

ライブドアは年間三〇〇億円の売上げでしかない。しかし、ニッポン放送乗っ取りのた

め八〇〇億円の資金を集めた。ライブドアに資金を調達したのは、投資家、あるいはベンチャー・キャピタルといわれるものだ。彼らは会社の売買を最大の貨殖の手段とする「冒險商人」である。

NHKが政府広報メディアとすれば、フジサンケイグループは保守反動メディアである。保守政治勢力、内閣調査庁が世論操作のためにでっち上げた情報をあたかも「事実」であるかのごとく公共のメディアを使い宣伝、扇動する。そんなメディアがライブドアに乗っ取られようがらまいが、われわれ庶民には関係ない。

ライブドアは旧勢力の有力メディアに手を入れた。手を入れられた古いマスコミ人、政治家は水鳥の音に驚いて逃げ出した平家のような状況をていしている。資本の論理は貨殖、株式会社にあつては株式の多数支配であることはわかりきったこと。攻めるライブドア、守るフジサンケイグループともに資本の論理で壮絶な血で血を洗うバトルを展開する。旧勢力は、ライブドアの資本の論理を「金儲けを優先しすぎる」「資本主義の悪い面が出た」と嫌悪感を示す。くり返すが、金融自由化でアメリカ流資本主義を日本に、ライブドアのホリエモンをつくり出したのは彼らである。

実業家は「三角術」

資本とはなにかを文豪・夏目漱石は『吾輩は猫である』で、実業家は「三角術」と語つてみせる。以下は実業家の卵である金子君と苦沙弥先生（猫の飼い主の学校教師）の会話である。

「ハ、教師はのんきでいいな。僕も教師にでもなればよかった」

「なつてみる、三日でいやになるから」

「そうかな、なんだか上品で、気楽で、暇があつて、すきな勉強ができてよさそうじゃないか。実業家も悪くないがわれわれのうちはだめだ。実業家になるならずっと上にならなくっちゃいかん。下のほうになるとやはりつまらんお世辞を振りまいたり、好かん猪口（ちよこ）をいただきに出たりずいぶん愚かなもんだよ」

「僕は実業家は学校時代から大きらいだ。金さえ取ればなんでもする。昔で言えば素町人だからな」と実業家を前に控えて太平楽をならべる。

「まさか―そうばかりも言えんね、少しは下品なところもあるのさ、とにかく金と情死（しんじゆう）をする覚悟でなければやり通せないから―ところがその金というやつが曲者（くせもの）で、―今もある実業家の所へいつて聞いてきたんだが、金を作るにも三角術を使わなくちゃいけないと言うのさ―義理をかく、人情をかく、恥をかくこれで三角になるそうだしろいじゃないかアハ、ハ、ハ、」

「だれだそんなばかな」

「ばかじゃない、なかなか利口な男なんだよ、実業界でちょっと有名だがね、君知らんか、ついこの先の横丁にいるんだが」

「金田か？ なんだあんなやつ」

「大変おこつてるよね、そのくらいにせんと金はたまらんというたときさ。」

資本の本質は「三角術」、あるいは「三欠く」術だというのである。恥、人情、義理を欠く。しばし名言である。資本の論理は今も昔も変わらない。（伊勢 太郎）

軍隊、戦争、国家

— 憲法問題の深層 (三) —

「三権分立」は幻想

議会制民主主義国家は①立法府⇨国会、②国会が決定した法の執行⇨官僚機構、③法の検証⇨司法の「三権分立」を旨とする。三権分立のイデオロギーは正しいか。正しくない。

自民党は国会で国鉄改革法という特別の法をつくり、国鉄労働者をいじめ、職場から追いやり、「政府政策は間違っている」と主張しつづけた国鉄労働者を誅首(かくしゅ)した。法執行を仕事とする運輸省等の行政機関である官僚機構は改革法実行にしゃかりきとなった。国労は司法⇨裁判所に判断をあおいだ。地方労働委員会で勝ちつづけ、中央労働委員会は国の「不法」を指摘した。国労弁護士団は判例から「勝ち必至」と判断した。三つの裁判は国労に負けを宣した。

国労組合員への不当労働行為は、天下公認の事実である。だが、国家、国家権力は一体となり、国労の主張を葬り去った。三権分立のイデオロギーは、支配階級の支配を貫徹するためのイデオロギー、国家は、支配する者(支配階級)が支配される者(被支配階級)を抑圧する機関・装置であることの証明である。

前号の「桜田テーズ」で述べたが、国家は「三権分立」の機関と暴力機関(自衛隊、警察、裁判所他、治安関係の情報収集をする内閣調査庁等の情報機関)で構成される。平時は三権分立の機関、戦時・革命時は暴力機関との機能分離である。

戦争、三つの構成要素

国家最大の「異常時」は対外戦争、そして内乱だ。軍隊はこのためにある。外に向かつては対外侵略、内にあつては時の政府、権力に対抗する者への威嚇・鎮圧である。軍と警察はしたがって、内と外の治安、戦争機関の役割をになう。権力にとって、したがって戦争は二つの性格をもつ。

戦争とはなにか。政治の延長、外交交渉の行き詰まりとその最悪の結果である。どんな外交交渉もすべて秘密である。なにがどんな交渉がおこなわれたかは、政府関係者―当事者と内閣官房最高責任者―以外はだれも知らない、知らさないのが外交の原則だ。政府の一方的情報と政治判断が「外交交渉決裂」と大使引き上げ、経済制裁、そして宣戦布告⇨戦争となる。

次に戦争の目的とは何か。イラク戦争にも明らかのように、敵を粉砕・せん滅、武装解除することである。戦争には法は存在しない。超法規である。

イラク侵略戦争にも明らかだが、戦争は基本的に三つの要素からなる。第一は兵士と兵器体系からなる戦闘力⇨戦力、第二は人口と面積をもつ国土―イラクは面積四三・八万平方キロ、二千七百万人の人口をもつ―に、米兵中心に十五万人の占領軍が駐留する、第三は同盟軍、イラク戦争では「有志連合」である。

戦争には三つの形態がある。まず、限定された局地的な電撃戦。これには特別に訓練された特殊部隊の戦術、兵士の熟練度、そして国家への忠誠心が問われる。しかし、戦争はつねに最悪の事態、総力戦を想定し準備される。全面的な対外侵略戦争の準備である。さらに、ナポレオンを悩ませたスペインでのゲリラ戦といったようである。

戦闘は一瞬の間におびただしい武器・弾薬、燃料、機材を消費する。兵士への水・食糧供給、糞尿処理が欠かせない。戦死者、戦傷者も続出する。したがって、戦争の根本は前線兵士の戦闘力と後衛の物資供給、衛生医療―軍事用語にいう兵站（へいたん）―の結合となる。

戦争に備えるということは、以上のように戦争への動員体制を全国すみずみに張りめぐらせることだ。これを有事法制との関連で整理すれば①直接の戦闘部隊である自衛隊法改正、②指揮・司令部の機構―昔流にいえば大本営―を定める安全保障会議、③戦争手続を柱とする武力攻撃事態法、④国民総動員体制、国民統制の手順を定める国民保護法制等となる。憲法はすべての戦争、戦力を否定する。しかし、有事立法という戦争法がつけられた。矛盾は深まるばかり。九条第二項改悪に総保守陣営は突っ走る。

戦争は国家権力最大の発動

戦争とは国家権力の最大の発動である。明治憲法は天皇を元首とし、陸海軍の統帥権は天皇にあるとした。維新の元勳たちが軍にニラミをきかし、「玉」として利用していた大正まで、軍を統帥したのは山県有朋に代表される長老だった。軍をはじめとする官僚機構は階級章がすべてに優先する。上官（上司）の命令は絶対である。元勳の死、軍上層の世代交代、日清・日露・山東出兵・シベリア出兵から、軍は政治への影響を強めていく。

軍人勅諭、教育勅語、そして「御真影」が明治憲法の「万世一系」「統帥権」と相まち、群れて流れて「国体」論を憲法とした。「皇軍」である。陸海軍が「天皇の軍隊」として、政治に関与し、政党の汚職と腐敗で、ついには大政翼賛政治（軍部独裁のファシズム政治）下、戦争の時代へとなだれ打っていく。

後藤田正晴、宮沢喜一は青年高級官僚として、太平洋戦争時代を過ごした。中曽根康弘は海軍主計大尉としてである。主計の仕事は軍のお金の管理である。だが、管理とは名ばかりで朝から晩まで芸者を上げてのドンチャン騒ぎであつたらしい。海軍で、彼と同じ軍隊時代を送った技術将校は、中曽根が国権の長に就いた時、「アノ野郎は軍を喰い物にノシ上がった男。こわい時代が始まる」と語ってくれた。中曽根は改憲を己の使命とし、宮沢・後藤田は改憲の前提に、「軍の縛り」を強調した。憲法九条二項、前文「改正」には慎重さが必要と主張したのである。手法の違いである。

この手法の違いが、一九九〇年代以降の保守反動化の進む中、中曽根は「改憲」派、宮沢・後藤田は「護憲」派というアナクロニズムもいちじるしい世論誘導がおこなわれた。自民党、保守主義者が「赤」と口をきわめて批判する朝日新聞の見当違いな論断である。朝日がかつて『改憲対護憲―中曽根・宮沢の対談集』を出した。あきもせず最近では宮沢と学者の対談集を出している。笑止なことだ。宮沢と中曽根の主張は同じ、「改憲」だ。くり返すが、手法が異なるにすぎない。

中曽根は骨の髄からの保守政治家で「国士」、それに対し宮沢は政治家というより調和、調整、手続きを重んじる官僚だ。それだけのことである。

戦争を体験した国会議員はいなくなった。民主党の小沢一郎は一九四三年、鳩山一郎の孫・鳩山由起夫は一九四七年、岸信介の孫・安倍晋三は一九五四年の生まれ。いわゆる「戦後」世紀である。彼らは軍、戦争の恐さを知らない。自衛隊は、自衛隊の国軍化を彼らに毎日のように乞い願う。階級章を胸いっぱい飾り付けた将官が、彼らに最敬礼。閱兵の

式典では、兵士たちが一糸乱れぬ挙手で歓迎する。戦争を知らない政治家たちは、「彼らはウイやつ」「彼らはわれわれに土下座の状況」と舞い上がる。

社会党が政権党になった時、最左派といわれた議員が、「おれは自衛隊の最高指揮官の一人」と、すっかり舞い上がっていた姿を今でも思い出す。新聞は一面トップで毎日、改憲状況を報ずる。すでに述べたが、総保守のねらいは、憲法九条二項、前文改悪。そこにどう世論を誘導するかに絞り込まれている。

(伊勢 太郎・つづく)

「人らしく」とはを問い直したランニングキャラバン

全国一〇四七kmを走り抜き、大きな反響を呼んだ「ロード人らしく 四国から東京ランニングキャラバン」が四月一日に完走・終結した。そして、九月一五日判決の鉄建公団訴訟については、難波裁判長が判決を書くであろうこの六、七月にかけての私たちの運動が重大な意味を持つ。言うまでもなく、鉄建公団訴訟は一八年に及んだ国鉄闘争最大の結節点であり、ここでの勝敗が国鉄闘争全体の帰趨を決めるものである。

そのことをふまえたとき、このランニングキャラバンがもたらしたものは、大きな意味を持つと思う。

一、経過と取り組み

昨年暮れに、中野さんからこの取り組みを試してみたいという話を聞いたとき、なんだか「夢物語」のような気がした。彼の体力からすれば、高知から東京まで、それは何とか走れないこともないだろうが、それにしても体はボロボロになるだろうと。そこまで走って、何の反響もなく孤独に東京までたどり着いたところで、何の意味があるのか、そもそも、随行者はどうするのか、費用はと、否定的なことばかりが頭をよぎった。各地の受け入れ態勢はと聞くと、「近畿までは何とかなる。中部・東海にも心当たりはある」という程度であった。ますます、否定的になった。

一月中旬、中野さんが北見から帰ってきた。やっぱり実行すると言う。準備・段取りはあまり前進していなかった。しかし、やると言う。彼がそこまで言うなら仕方ない。せめて、四国からは華々しく送り出してやろうと思った。

二月に入って、徳島の河村さん(徳島農協労連委員長)と打ち合わせをしながら、随行者・車は、四国各地での励ます集会は、とばたばた準備を始めた。応援弁士に至っては、「川田悦子さんがいいんじゃないの」と打ち合わせのその場から電話をする始末。川田さんは「中野さんらしくていいじゃない。楽しい取り組みになるわね。ぜひ行きますよ」と即答してくれた。徳島は池田町職を中心にわいわいやっているらしい。さあ、後に引けなくなってしまう。

十分な準備が整わないうちに、三月一日、出発を迎えてしまった。まだ、不安が先立つが、まあ一応東京まではつながるような気がしてきた。昼に出発式をやって、スタート。途中、見知らぬ人が、追いかけてきて一万円カンパをくれ、立ち寄った食堂ではタイ焼きをごちそうになったとのこと。翌日からは、地元新聞に結構大きく載ったこともあって、ますます反響が大きくなった。沿道や車から手を振ってくれたり、ガソリンスタンドでは差し入れも。こりや、なんだか手応えが出てきたぞという感じになってきた。それやこれやで四国の第一ステージは終了。ところで、中国地方は大丈夫か、広島は大丈夫だとして

も、そこから先はと、また不安も広がる。

ところがどっこい、中国地方を四国を上回る支援体制で乗り切り、近畿で盛大な応援をいただき、中部・東海では、中野さん自身も初めて会う人たちが受け入れ態勢を作ってくれた。各地での報道も大きく、ついに首都圏へ。こうなりや、ゴールへ駆けつけるしかない。徳島に三月三一日午後一〇時に集合して、車で東京へ向かった。

四月一日、キャラバン最終日。三鷹市役所を出発して、杉並区役所、都庁、JR東本社前行動を経て、衆議院議員会館前へ。ランニングキャラバンに呼応した七十二時間ハンスト参加者は意気軒昂だ。佐久間忠雄さんがいる、米沢市職の渡部さんも、そして中野ファミリーもいる。

ゴールの鉄建公団前集会は少しばかり感動的だった。ゴール前で中野さんの配偶者貴子さんと雑談していたのだが、普段は結構毒舌の彼女がぼつり「あの人は言い出したことはやり遂げる人。だから、私はあの人のやることには反対しないの」と。新聞奨学生一年で少し大人びた長男雄太さんは、最終コースを一緒に走る演出に「こんなのやらせですよ」と少し反発していたが、中野さん、ノリノリの次男龍二さん共々先頭に立ってゴールイン。「夫の背中が今日は大きく見える」という貴子さんのあいさつに二人とも少しウルウルきていたようだ。四月からは四人家族全員離散の中野家だが、この家族なら大丈夫と変に納得してしまった。

夜の集約集会には、趙博さんが駆けつけてくれ、ミニコンサートと中野ファミリーとの掛け合い漫才(?)。最後は「人らしくパート2」の主題歌「光のエチュード」の大合唱。そして、中野さんは、「各地でいろんな出会いがあり、それらの方々の思いと支えで走り切れた。一〇四七名の思いを一kmずつにして走り、ゴールして軽くなるはずが、支えてくれた方々の思いでむしろ背負うものは重くなった。一人で背負いきれないこの荷物をみんなで担ってほしい。」と訴えた。本当にその通りだと思う。

二、キャラバンが示した可能性

確認しておきたいことが二つある。

一つは、キャラバンを成功させたのは、一人中野さんの努力ということだけではなく、それを支えた国鉄闘争の持つ力なのだとということだ。

超人的・鉄人・無謀もやり遂げれば快挙などなど、中野さんに対する賛辞が並ぶ。確かにすごい精神力・体力だと思う。しかし、中野さんがこの取り組みを発想し、実行できたのは、ご家族はもちろん北見をはじめ闘争団の仲間の存在であり、日頃から彼の闘いを支えている四国の仲間であり、そして中野さん自身も出会ったこともなかった各地の人々の支えなのである。たった一人が決意したことが、それを支えたいという共感を呼び、その共感が広がったからこそできた取り組みなのである。

確かにニューヒーローの誕生なのかもしれない。しかし、それを誕生させたのは、これまでの国鉄闘争の積み上げである。鉄建公団訴訟という厳しい闘いに踏み込み、見も知らぬ四国の地に闘いの場を求めたことがあって決意・達成させた取り組みなのである。

もう一つは、キャラバンでみんな元気になった、しかし、だからこそ、それだけでよしにしてはいけないということだ。

私たちは、国鉄闘争を今日のリストラ・首切りの原点であり、憲法改悪につながるもの

ととらえ、従って一〇四七名の解雇撤回と国家的不当労働行為への謝罪は譲れないものとして訴えてきた。爆発的とは言えないかもしれないが、今回のキャラバンによって、この訴えへの共感が広がったと思う。

中野さんが言うように、「各地の点がレールとしてつながった」のだとすれば、今度は、そのレールの上に汽車、つまり運動を走らせなければならぬ。中野さんとは、「各地に広がった支援の輪をしっかりと結びつける取り組みをしよう」と話し合っている。具体論はこれからだが、もう一度、今回支援をいただいた方々の所に足を運ぶことから始めようと思う。

中野さんと同じことができるわけでもないし、する必要もない。しかし、当該闘争団の皆さん、そして国鉄闘争に関わる人々一人ひとりが、自らのできることを考え、最大の努力をしなければならぬ時期だし、キャラバンはそのための武器を与えてくれた。

たとえば五〇万人署名がある。目標に遠く及ばない現状を何とかしよう。足を運べるところはいいのか、もう一度考えてみよう。既に、自治体の仲間は「国鉄闘争を支援する自治体労組の集まり」を実現しようとしている。闘いを広げ、地裁判決に影響を与える取り組みであれば何でもやってみるべきだ。与えられた時間はそう多くない。

リストラ・首切りが蔓延し、貧富格差が拡大していることに、多くの人々が疑問を感じ始めた。この国が豊かになっても、国民は生活も心もどんどん貧しくさせられていることに、誰しもが怒りを感じ始めた。「国労をつぶし、総評をつぶし、左をつぶして憲法を変える」という中曾根の意図がその通り実行されようとしている。

しかし、この国には良心を持って闘い続ける人たちがまだまだたくさんいる。キャラバンは、私たちの闘いがそうした人々として結びつく闘いへとさらに発展する可能性を示した。その可能性を現実のものにしなければならぬ。

国鉄闘争は、この闘いが問い続けてきたはずの「人らしく生きるとは」という課題に本当に結びついたとき、一段上の強さとひろがりをもつのだと思う。

新たな闘いが始まる。

(高知県職員労働組合 山崎 秀一)

北海道「国労闘争団激励・交流の旅」へのおさそい

― 旅程は六月二二〜二四日、二泊三日です ―

私たちは国鉄分割民営化が現在の社会・政治状況の根本であり、国鉄闘争の勝利解決こそ日本労働運動再生の要、憲法改悪等の政治反動をひっくり返す力となると、全国の地域・職場から支援・連帯・共闘してまいりました。

国鉄闘争は一八年にもおよんでいます。一日も早い勝利解決こそが国労闘争団員・家族、そして私たち支援者の思いです。その鍵を握る鉄建公団裁判は三月結審し、九月一五日に判決となったことはご承知のとおりです。国鉄闘争はカケネなしに正念場を迎えることとなりました。

「勝つ」条件は二つです。一〇四七人の仲間が政府・鉄建公団(運輸機構)、JRに「私たちこそ当事者、解決を」と足並みをそろえ国労闘争団要求をぶつけ、せまること。鉄道運輸機構への国労第二次原告団、全動労、千葉動労の裁判開始。さらに国労第二次原告団の拡大で裁判参加者は一〇四七人の過半数にもなることは私たちの共闘だけでなく、当事

者と家族に大きな勇気を与えています。

もう一つは国鉄闘争に結集した力で憲法・教育基本法改悪等に象徴される政治反動をうち破る戦線をつくることです。

「たたかう会」は結成以来、毎年、北海道・九州の闘争団員・家族と、互いに元気をもらい合う旅をおこなってまいりました。

今回の「旅」は少しばかり欲張っています。旭川に「旅」参加者が全員集合し、北海道各地の闘争団員・家族と国鉄闘争を一八年間支援しつづけていらっしやる北海道のお仲間と国鉄闘争を中心に労働運動、政治のあり方について交流したいとの想いです。

私たちは九月一五日判決をひかえ、五〇人前後の団をつくり、四つのコースに分かれ、全国労働争団とかれらを支援する仲間と交流し、国鉄闘争勝利の力をつくりたい、つくり上げねばならないとの思いで今回の「旅」を計画いたしました。

「旅」の日程は六月二一〜一四日の三日間。詳しくは別紙を参照いただきたく思います。私たちの意をおくみとりいただき、「激励・交流の旅」に全国からご参加いただきますことを心からお願ひ申しあげます。なお、旅の詳細は左記のとおりです。

記

▽名称 「たたかう会」北海道国労働争団激励交流の旅

▽日程 二〇〇五年六月二二日(日)〜一四日(火)二泊三日

▽参加費 七万円(ただし、羽田空港往復含む交流経費のみ。羽田空港までは自己負担)

▽参加費振込先

【口座名義】 国労働争団とともにたたかう会

労働金庫 中央労金銀座支店(普) 七二二〇四三二

郵便振替 〇〇一三〇一四一七四〇〇二

▽参加締切 四月二五日(月)とします

▽連絡先 〒一〇一〇〇三二 東京都千代田区岩本町二一七四

米沢ビル一階 労働運動センター

TEL 〇三―五八二〇―二〇七〇

FAX 〇三―五八二〇―二〇八〇

担当者 橘 幸英 / 滝野 忠

▽呼びかけ人

矢田昌三(大分連帯する会) 山崎秀一(四国共闘会議)

田中真吉(鳥取守る会)

野坂昭生(支援する会京都) 杉山淳(静岡共闘会議)

小山一郎(共に闘う新潟の会)

畠山勝巳(秋田守る会) 池沢健(支援する神奈川県ネット)

金平博(国労新宿駅分会)

金沢壽(東京西部実行委員会) 滝野忠(国労働争団とともにたたかう会)

高橋義則・橘幸英・横堀正一(労働運動センター) 宮坂要(国労働争団・家族を守る会)

◇ 編集部 だより ◇

▽新自由主義の理想潮流の大元は新古典派。古典派経済学の元祖はアダム・スミス『国富論』、アダム・スミスの「みえざる手」を現代に適用したのがミルトン・フリードマン。

▽フリードマン著『選択の自由』を精読中です。ブッシュがめざす社会保障制度「改革」、「オーナ―シップ・ソサイエティ」とはなにかの理解を深めたいのが問題意識です。

郵政はどこへ行くのか

郵政民営化が小泉政権の独走で進められている。四月五日、小泉は裁定を下した。経済財政諮問会議で既に合意されている事柄等を引きながら、小泉郵政民営化の構想を探っている。

〇七年に民営化、一七年に完全民営

▽〇七年四月に公社を民営化。最終的に民営化する一七年までに持ち株会社を設置。
▽四機能を分社・独立させる。窓口ネットワーク、郵便事業、郵便貯金、郵便保険、各株式会社。

▽郵便・郵貯・保険の各社を地域分割する可否かは、新経営陣の判断。

(二〇〇四年八月六日経済財政諮問会議で合意・八月二二～二四「朝日新聞」)

新規と通常貯金も政府保証は廃止

- ▽郵貯と簡保の新規契約分と通常貯金は政府保証を廃止。
- ▽民営化前に契約の定額貯金や簡保等は、旧勘定として分離、政府保証継続。
- ▽旧勘定は安全・確実に運用。
- ▽旧勘定の管理・運営は新規契約分と一括し、収益は持ち株会社を得る。
- ▽預金保険機構や生命保険契約保護者機構に加入。
- ▽預け入れ限度額は段階的に廃止。
- ▽融資業務は段階的に解禁。
- ▽原則として民間と同じ納税義務。

(二〇〇四年八月六日経済財政諮問会議で合意「朝日新聞」八月二二～二四日掲載)

郵便事業は国際物流を視野に

- ▽郵便事業会社は、郵便集配と国内外の物流事業。
- ▽窓口会社は「郵便、貯金、保険の窓口業務」「自治体の公共サービス」「民間金融機関の業務」を受託。小売、サービス業など幅広い事業分野に進出。
- ▽〇七年までに子会社への出資、物流業務など拡大。《ユニバーサルサービス》
- ▽郵便会社に義務づけ。必要なコストをまかなうため、事実上、親書の独占分野を残すなど優遇措置。
- ▽窓口の設置基準を明確化し、過疎地の拠点を維持。

(二〇〇四年八月六日経済財政諮問会議で合意「朝日新聞」八月二二～二四日掲載)

七万人の人員削減《郵便局網の利便性》

- ▽住民のアクセスが確保されるよう設置基準を明確化し、過疎地の拠点を維持。
- ▽複数の郵便局を兼営するフランチャイズ制導入。《郵政労働者の雇用》
- ▽〇七年の民営化時点で国家公務員の待遇をなくす。

▽今後一〇年間で定年退職七万人と試算される自然減を基本に人員削減。
(二〇〇四年経済財政諮問会議で合意「朝日新聞」八月二二―二四日掲載)

郵政民営化は大泥棒劇

郵政民営化は、財界による国民財産の大泥棒劇である。郵便法第一条には「郵便の役務をなるべく安い料金で、あまねく、公平に提供することによって、公共の福祉を増進することを目的とする」と明記され、郵便貯金法第一条には「簡易で確実な貯蓄の手段としてあまねく公平に利用させることによって…その福祉を増進することを目的とする」と謳われている。

たしかに、この事業の中に、特定局制度というものがあり、事業の周辺には郵政官僚の巣くうファミリー企業があつて、事業を食い物にして来た事実はある。しかし、郵便法や、郵便貯金法がと見える国民の福祉的側面は、そこに働く労働者の努力によって営々と引き継がれてきたという事実があることは誰にも否めないはずである。

郵政民営化とは、郵政事業がこれまでに孕んできた官僚の利権構造とは全く質の違うものであり、一口でいうなら、財界による国民的財産の大泥棒劇なのだ。

狙いは郵便事業の国際物流企業化

経済財政諮問会議の合意事項に「郵便事業会社は、郵便集配と国内外の物流事業」と明記した点に注目する必要がある。「郵政公社はすでに、日立物流や山九(新日鐵系)、三井倉庫と提携し、山九と共同で中国などアジア・日本間物流網を構築、郵便ネットワーク活用第一弾として、八月からシンガポールよりパソコン周辺機器輸送。日立物流とは、八月から札幌の化粧品会社の全国配送(売上年間七千万円)。(「日本経済新聞」二〇〇四年七月二二日二八日報道)」などと報じられていることに注目しなければならない。

郵政公社は、既に民営化後をにらんで具体的に動き出しているのである。更に、経済財政諮問会議が、郵便事業の業務の範囲を「一国内外の物流事業」と規定したのには、大きな意味がある。多国籍化した巨大資本が海外生産に力を入れて久しいが、日本企業の海外生産比率は一九九二年に六・二五パーセントに過ぎなかつたものが、二〇〇二年には一八・二一パーセントに達し(経済産業省統計)、その後も上昇線を描き続けているのである。海外に生産拠点を移し続けている国際資本の物流のネットワーク形成の役割を郵便事業に担わせようとしているのだ。

七万人削減と人材活用センター

経済財政諮問会議が、「今後一〇年間で定年退職七万人と試算される自然減を基本に人員削減」を打ち出したことに注目しなければならない。新規採用がある訳なのだから、定年退職だけで、この減員が成り立つとは到底―思えない。

現在、水面下で、郵便内務事務のアウトソーシング化を基本とする大合理化が計画されているが、これは、道順組み立ての非常勤化や、小都市、郡部における三〇キロ圏内の集配局の道順組み立てを拠点局で行う(配達デポ方式)等の合理化とあいまって、大量の余剰人員を生み出す施策である。だから、その受け皿として「人材活用センター」構想が持

ち上がってきたのである。

経済財政諮問会議がいうところの「一郵便集配と国内外の物流事業」とはスクラップアンドビルドの全面展開であり、スクラップされるのは「郵便集配（アウトソーシング）、非常勤化の全面展開」であり、ビルド化されるのは、「国内外の物流事業」だろう。小泉郵政民営化で、高齢者は激しい肩たたきを受ける目にあい、若年労働者は労働内容の激変に晒されることになる。

大泥棒劇を許すな

計画によれば、二〇一七年からは完全民営化である。民営化とは、一口にいえば、国有財産の払い下げがある。払い下げを受けるのは、それが企業であれ個人であれ株式を所有できる財力を持った資本家的金持ちである。郵政が所有している資産は、諸先輩たちの営々とした労働が築き上げて来た国民の財産である。これをただ値同然に払い下げようというのだから、認める訳にはいかない。堂々と、高らかに、郵政民営化反対の声を。(S)

定 年

—「ライフワーク」（護憲運動）に打ち込む—

四十年走りつづけてきた。いろいろなことがあった。

口ではとうてい言い表わせないことも含めて本当にいろいろなことがあった四十年。

お世話になった方や、大先輩に旅立たれ、力の抜け落ちた時もあった。

結婚・そして二世の誕生。(一男一女)

息子の東京大学入学。入学式と卒業式への参列。

娘の結婚と孫の誕生。

京大大学院を経た息子の就職。これでやっと肩の荷が下りた。

九八年十月からの六年六月の間——かつて経験をしたことがない事の連続だった。

「人の心は変わる」——身をもって体験することもできた。

貴重な経験を与えてくれたと今では感謝をしている。

『年を重ねただけで人は老いない』

理想を失ったときに初めて老いがくる

人は信念と共に若く疑惑と共に老ゆる

人は自信と共に若く恐怖と共に老ゆる

希望あるかぎり若く失望と共に老い朽ちる』

我が人生に悔い無し。

今後は健康に留意し、ささやかながらもライフワークに打ち込みたい。(岐阜・K生)

◇ 読者からのおたより ◇

町田市教育委員会の「通知」 町田市教育委員会は、今春の卒業式・入学式で児童・生徒が校歌などと同じ音量で国歌（君が代）を歌う事ができるよう、事前に指導することを定めた通知文を、市内全小中学校長に出しました。昨年の卒業式・入学式で「国歌斉唱」の際起立しなかつた先生達を、二〇〇人を越える処分をしている東京都教育委員会でも、児童・生徒の声の大きさまで指示していません。通知文はこの他①舞台上に「子ども達の作品を飾るな!」、②教職員（来ひんの）座席を指定せよ、③校長に職務命令義務づけ例文まで配布しています。

編集部より 「日の丸」「君が代」が人を庄すようになった。憲法改悪で「天皇」条項が変えられたら、大昔の「御真影」復活も考えられる雰囲気です。

コンタ 横田基地飛行差し止め訴訟審理中です。高裁では、特に国側では一〇年コンタを持ち出し線引きの引き直しをしました。

コンタとは、騒音指数であります。それは国側が敗北した場合、コンタは地域住民、各自治体の

大問題であるからです。各自治体コンタは各家庭の防音工事の基になります。指数は一〇〇、九五、九〇、八五、八〇、七五、七〇、六五、と、以下コンタを縮小すると賠償も少なく、七五コンタ外は補償金を出さない、防音工事も工事費など出さない、やらないなど大きく異なっています。いままで防音工事で各家庭に費やした費用の一室につき一〇%のカット、また危険地域であるにもかかわらず住民に何の知らせも告示もなしに、勝手に住居を構えたお前たちが悪いとばかり強引なカットは絶対に許せません。

一人で吠える 「合併しないで自立する」と宣言したわが町ですが、財政はまさに破綻寸前。自らの保身だけを考える町執行部と議会多数派。そんな中で一人で吠える小生ですが、地方自治体の自立とはとてもむづかしく、道は遠いという思いです。

編集部より 日本祝日はすべて『日本書紀』、明治の天皇制に由来します。世界は祝日はどう決めているのだろうと調べてみました。欧米はキリスト教国ですから、聖誕祭を中心祝日とされます。他はとみれば地域コミュニティ独立の日なんです。したがって、全国統一の祝祭日はほとんどありません。地方権力、つまり地方分権なんです。日本の地方分権とはえらいちがいです。

処分の歌 わが君は千代に八千代にさざれ石の巖と… 君が代は千代に八千代にさざれ石の巖と… 千百年前の読み人知らずの詩ではあるが、考えてみるとこんな階級的な詩があったのだろうか。ただ単に君に媚びて自分の保身を図っているだけではないか。それにしても祝いの詩が強制されて処分の歌に変容する。保身しか考えない管理職は問答無用の強制。強制は許されないと強制しなるとか前年通りにしたが、四年間も担任した子ども達に渡す証書を一枚ずつ校長に手渡していたが、喜びは卒業式。入学式もくる。春は遠い。

編集部より 『万葉集』いろいろなんですよね。庶民の自由な歌を集めたもの、さらには天皇讚美の巻というようにです。

「勤務評定」に大きな不満 東京二三区には主任、主事、係長（主査）、総括係長という職階があります。また特別昇格という制度もあります。それぞれの職や級に昇格する際には、それなりに経験や年齢が加味していた選考となっていました。近年その加味が薄くなってきています。理由としては「成績主義の貫徹」がうたわれていますが、その成績とは勤務評定が大きな位置を占めています。しかし評定者たる管理職の質に組合員の不信が高まっています。若くして昇任した人はもちろん能力がある人でしょうが、その人一人で仕事ができるわけではありません。そう任したことを無視した昇任、昇格では当局がいう「職場の活性化」につながるわけはありません。微妙な能力差で大きな賃金格差がつけられてしまいかねません。組合としてはこの流れを何とか変えたいのですが。

編集部より イチロウ、ゴジラ松井の世界、セールスマンなら話は単純。しかし、グループ、チームをつくりの仕事は、互いの能力の総合でもあるのね。かっこいい仕事に就く者、彼ら下支えする者。どこもみんなそう。「評価」し点数つければぎくしくりするだけです。成績主義の本質と実際を合わせ宣伝しつづけて下さい。やがて「やっぱりそうだ」となるに違いありません。楽しく拝読 ごぶさたしていますが元気で活躍していることと思います。毎旬、楽しみに読んでいます。これからも闘いの指針として期待しています。

編集部より 歴史の勉強会は進んでいらっしやいますか。憲法問題を契機に、『日本書紀』、『古事記』、北海道の立花さんのおたよりにもあります『万葉集』から、日本の歴史、伝統、文化を考えてみることも一興です。

アクション・プランフェーズ2 郵政公社は、向こう二年間（一七―一八年度）の経営計画「アクション・プランフェーズ2」を発表した。その中味は、フェーズ1での人減らしやコスト削減の成果のうえに、更に効率化を徹底する内容となっている。

郵政関係での五千人の削減を含む、三事業トータル一万人の本務者削減を柱とする効率化計画である。フェーズ1の二年間の効率化で、職場は業務事故の頻発と辞め急ぎが急増。新規採用の抑制で、どの職場も欠員が常態化。「もうこれ以上の効率化は限界」「これ以上の非常勤化は無理」というのが職場の仲間の率直な声だ。

「震災一〇年 夢のかけら つなげ」 昨年をあらわす一文字は「災」。まさしく世界中が災害に見舞われた一年だった。そして、今年。世界で唯一の被爆国となった戦後から六〇年、働く者の生活をかけた春闘がはじまって五〇年、神戸の港に核積載艦船の入港を拒否する非核神戸方式が誕生して三〇年。そしてあの忌まわしい阪神淡路大地震から一〇年という節目の年。様々な思いが出されました。そして、被災地メーデーの原点は「夢」。働く者が被災者が追い求めてきたそれぞれの夢を一〇年目の被災地メーデーに持ち寄り、未来へ世界へつなげていこうと今年のテーマが決まりました。

（第一〇回被災地メーデー実行委員会）